俳諧七部集

中村俊定文庫
文庫 18
687
1

俳諧七部集

中村俊定文庫
文庫 18
687
1

俳諧七部集

宗教法人 相田神社
中村俊定文庫

曙ろんとんくのうおきあひく
勢田わたるゆうぬ渡し舟さしの
くすわゆくはかわたるとそてはて也
いとのうなわ重ねのはわたをる
竹墻ちかとちるきよちちうてる
ハまうきを牛母花出汐哉

二月十八日　荷兮

まうくや人うぐくの伊勢まいり
桜ちる中馬ながく連　重五
山うち月一ぱいよ鉞立く　雨桐
鎧なぐれし史うあるる　李風
志ふ原ようくゆハ弱なく　昌圭
くくしるゆ中の巻ろんく　執筆

須磨寺より行ひの帷子脱ぎ捨て　重五

とりくらかくる笛を戦く　荷兮

文王のうしろを土はらひて　李風

雨の手ぶり角のなさ草　兩杓

肌をとゝ一度八背をなくせり　荷兮

頃城乳をうくくと晨の　昌圭

青うまよ猿よ人の紙移り　兩杓

わもくとを入て神輿うく里　重五

鳥居より半道真の砂行く　昌圭

花よ長閑ノ人帝蔦わぐふち　李風

柳は陰ぶらぶらよ鞠るなり　重五

入る日ゝ蟬いぐぐなり　荷兮

二

ふるゝ、麥なぐ家よ連行く　李風

うゝ懐ゝ梓きゝめれ　兩杓

黒髪をたゞわけ而　荷兮

いとゝき五位の針之　昌圭

杖の水に写る月かな　兩杓

くぐつの跡も人と共にあで　重五

朝朗豆腐を蔦よりもらひけり　昌圭

念仏さゝぬきて秋ぞくれぬ　李風

穂蓼生て蔵を住ゐ侘て　重五

ふる名を掲の名ゝ月　荷兮

傘の泡辺付ふなが雨の昏　李風

幼蝕ふるくしかくく　白杓

ゆくゝ人あれ秋ゝ八分よ　荷兮

均瓶ひけりを二人して　昌圭

せゝわゝ局蔵よ年ゝ　兩杓

記念ゝゝ堀の芦畑　重五

いくゝと花と行たいさぐく　昌圭

才も兄ゝ多ゝゝゝゝ　李風

三月六日四季水亭にて

且藁

[illegible]坂や畑[illegible]山[illegible]八重さく

[illegible]野水

[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]荷兮

[illegible]節[illegible]袴[illegible]

口[illegible]清[illegible]

越人

[illegible]破

羽笠

[illegible]

執筆

ウ

笠ぬさを奉るとはなりの　野水
菜わかな沼よりいとをくるとく　長兼
長町ゆばとく二人髪剃（カミソラ）ん　越人
鞦いうて車ゆくそぐ　荷兮
鰐負て大津の渡よりの　曲水
何ゆゑ国の声　羽笠
鶏なくなりぬるとゆゑ　野水
義をたゝん百日のうち　長兼

雲人を蓑を絶を妹の　越人
月かさ浪よ重石（フモレ）くる　羽笠
古ろの水の根よ新鮎　野水
汎をた春の場の山　長蕉
のもや紙業の祝伊勢　越人
四待のうゝ代眉の図　荷兮
物ゆ人軍の中ハ行つきよ　羽笠
名ゆかち栗とぐ上ケ　野水

大年を念佛とあつ蓑須棚　且藁

ちはやぶる無我よりの陳や　越人

ゆくすゑの入るを拘杞人く　荷兮

色ちよ世日ちやうやう変れ影　羽笠

一東ふる宿を馬上寺ふれや　四水

こを魂まつるさびしき月　且藁

陽炎（ケウ）乃ちゝのとゝまるまゝ　越人

雨ふりぬ哥いそゝく　荷兮

田をうゝむ蛙の生とり　羽笠

力乃命をたぶ〳〵中乃子　四水

蓮（廿七）や之井のまるれ松ちよ　且藁

るびくゝ乃ゝぶ雪のふゝく　越人

人つまゝ乃廿九日乃月さむき　荷兮

天乃ゝ乃ゝ氷ゝ　羽笠

三月十六日　且藁ノ田家ヨ

ミ角ヨ之ハく　野水

蛙乃こゑきこゆゆゝしき森見れ

額よりなかるゝ雨乃ゝ　且藁

巌意ヲ出石ヨ乃真ヲ宿りゝく　越人

まゝくゝ人をゝこゝ乃馬乃ゝ　荷兮

之ゝく乃ヲ渡ヲ乃月新り　冬文

芦ヲ穂を拭ゝ傘ヲ乃端　執筆

ウ

磯ぎなる施餓鬼の僧の集りく　且藁

岩のひとり蔵うゆる宝　野水

面の日も瓶焼やん煙たん　荷兮

ひぐらきるも旅の一はる　越人

尋よる物ゑい仕まば猿丸也　野水

解てやをりん枝むをる私　冬文

今青い更ふてやうぬ

月十九日　荷兮室にて

咲ま色の菊よ行すき白露ぞ　越人

秋の和名よるるる　且来

初しぼ色よりげ火をけ　冬文

別の月よなるをわるを　荷兮

秋ぞ花四の宮ちりい唐輪て　且藁

ゑゆく通のゑも山たり　野水

永き日やとゝ紙とけるゑ　荷兮

貧のよ　年ゑる五月雨中　越人

紹鷗り飄（フヒ）るかうして水ハ行く
連哥入もしてうるおいそがし　宗文
瀧壺ゝ岩押まぎて音こそ　趙人
岩苔ゝの雫よさぎゝも　基業
ひさかたゝ泉（キヌ）ゝくゝ世の中ゝ　宗文
莚二枚もむろき家　趙人
朝毎の露あらそれさに変化ん　基業
春うちを送るきれくゝの月　四水

[illegible]の日毎に網入よ　[illegible]
る羽の湊おびゝ多ゝ　宗文
ゝ（ウ）ゝ山ざくれ花ゝ　四水
ゝゝ一沼の草の名ゝ　[illegible]
ふゝ入ゝ水波よ立ゝ　趙人
餌を食はくいゝ居ゝ代　基業
山ゝ花所ゝの[illegible]　宗文
[illegible]　荷分

追加

三月十九日舟泉亭　越人

山ぶかみ　ぶらぶら迫のそでしまず

蝶ちりぬ　ちりぬ　ぬ　舟泉

きょうぶや　餅晒さぬき雪　聽雪

行幸　ゆくよ　洗ふ　玉器　蟲蟻

翔日を鷹ぶり　鍛冶ぬいぬく　荷兮

月なきを　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　概筆

春

昌陸乃杯に[illegible]御代の[illegible]　利重

元日の本[illegible]蓬足[illegible]　重丸

初[illegible]遠里牛[illegible]日[illegible]　昌圭

[illegible]海[illegible]麥[illegible]　桐

門[illegible]菊園入雪[illegible]　舟泉

鯉の音水に入間くかな　羽笠

舟[illegible]小杯[illegible]　且臺

晴入人頻牡丹咲くよひいきけり　杜國

獺元日星の照りうれ　犀々

星くくかきまぜうれ冬の雲　春霞

[illegible]小牡角ふれ牛の夢　聽雪

朝日二分柳の動く白ひうれ　荒兮

[illegible]の[illegible]ひくき雲かな　同

芹一摘てけく泥なき獣ふ　[illegible]

[illegible]人の行へ[illegible]

みくまの[illegible]　越人

古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉

傘張の照り胡蝶の[illegible]　重五

山や[illegible]墻根の[illegible]　亀洞

花よりもあし麦より直ぐ[illegible]　越人

春野吟

足跡よ梶を曲る菫二ツ　杜國

禁寺[illegible]かくれぬ[illegible]　芝元

榎はまて探乃遅きあがれ　荷兮

餞別

藤乃花そこらの山を別ぶ　越人

山畑乃茶つをとらせ今ろれ　重五

蚊いりよ森も夏夜半ぞ　同

夏

ぬくまるそこの山鳥尾八重　九白

新公さ油乃焼くある夜ぶ　素龍

かつこる板屋の脊戸乃一星　越人

うもきさそこかれ柳の下　杜國

乃竹乃こをたる蛍　亀洞

傘をそこまで蛍こが来ぶ　毋泉

武蔵坊をこうぬ

さじかもやもこゆ宮の女川　高露

夏夜乃東ろ星こゆるかな

鳥くもかくれぬる月　聽雲

老聃曰知足之足常足

夕ぐれの雜炊あつき菜屋哉　越人

篠の露の微雨こぼして鳴蚊かな　卿雨

けしきなる中に居ながら　虚交

萱草一ハ頃き花の色　荷今

蓮池のよりくつろぎ侍れん　仝

曉の夏ぶすまの遅き哉　昌圭

夏川乃青ゝ宿ゝ岳ゝ書路哉　重丸

譬喩品三界無安猶如火宅

といへる句を

六月乃汗ぬくむ居る臺哉　越人

秋

脊戸ゝ細ゝ咲ゝ見ゝ咲ゝ見ゝ咲ゝ　且臺

貧家乃むゝ

玉ゝ茅ゝ柱ゝむゝよゝゝれゝ　越人

[illegible]　雨桐

きわ〳〵人をやとひる月見哉　芭蕉

山寺ゝ夏はすゝしき月見哉　越人

瓦ゝ家もあるも秋の一月　野水

八鳥をかまる屏風の絵をそて

見足さゝ顔のゝ色月見哉　仝

待恋

ちぬ夜を寒ゝ一人寝ん　荷兮

閑居増懸

秋ひゝ琴柱ぢゝ寒ん後　荷兮

野鳥ちさを一つん鳴より　舟泉

冬

馬ちぬ牛ハ人間の村ちん　杜国

芭蕉ちを宿ゝ伝ちく

雪ちゝふ籠ゝ蚊屋を忘ん　大垣住　如行

雪ちゝ乃ちゝ草のよゝ蔦ん　昌碧

馬をさへながらの雪のあけぼの　芭蕉

行燈の煤もそぞろ寒しなり　越人

芭蕉翁をおくりてとて

この比の氷しきりに名おもん　杜國

隱せよかしの宿をそぞろ寒

わらびきの家ぢりの名を竜　荷兮

貞享三丙子年仲秋下浣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

出雲中仕

[illegible]

芭蕉

[illegible]

有明のうしろ酒屋うたるく　荷兮

うしろ姿をあるふあのむまく　重五

朝鮮のほそあ　[illegible]　杜國

白菊ちあくに野ちく米を刈　正平

わのんをあを後にまとのたをりあく　時雨
髪をそやまとやまとやまとのふ身のうと　芭蕉
ふりわのうくと乳をたもあわをて　又
こくんめくてしたいてすくとなく　荷兮
新法（カケボウ）のあのつすくしくゆを結く　芭蕉
あるくをくらんくきくて虚家（カライエ）　社國
因中ほくこたんの御落るくろ　荷兮
暮くくをを引人いくんくの　野水

半くくのほくを横くなるる月雨を　社國
よくあくさうくを町くくを春る　又
二の尼くくを濡れ出のくさうくくう　時雨
様をひくくにくくう鼻うむ　芭蕉
のりあをを蘆遠紙おあるるる　又
いまを恨をくをくをくをる声　荷兮
ぬすんの紀念の松吹おあく　芭蕉
出くくを宗祇清名を付し水　社國

冬の日

笠ぬ冠て無理ぬる小河内 荷弓
みそのふくらすの唐苣 時雨
ちらすと砕らを人の脇の何 杜國
烏賊ハちれとの国此ちるる 重又
あくれと此謎ちをとらす 熟玉 時雨
秋水一升ちもつてきを夜を 芭蕉
白茶の茶白の坊く自ちれて 重定
中ちく木槿ちもむ琵琶ち 荷弓

うしの花ちもちる草花タちる 芭蕉
箕ちく鮫の魚ちる 荷弓 杜國
ワのいのちと西ちる星ちく 荷弓
ちもちをいちれまちうちいさ 時雨
綾ちく居湯ちく志賀の花濃て 杜國
廊下ちを藤のちけちちやや 重定

[illegible]牡丹
[illegible]を振袖

[illegible]を待てうる　食　杜國

[illegible]の蕣の　墜水

[illegible]の蝶の[illegible]　芭蕉

[illegible]　荷兮

麻呂の月神く鞨鼓とうち[illegible]　重五

桃[illegible]貞徳の　冨　正平

百こゑる深草の田深わかへて　杜國
奥のさはらぬ我只なるべく　芭蕉
床あたらしく清進しいとなる男　荷兮
孫さはなきけれ恨このうわし　杜國
いわしと癖ちさる地のうかよ　野水
明りそうこと二重にうべ道わとん　重辰
小三たく盃ら新たなる　芭蕉
月無く重のしれ　杜國　ぬす人　杜國

猪あしのかしわ弘望蔵く　重辰
ちりしくかしみ地蔵切町　荷兮
物うるれうち世姥のうしく　杜國
うぶ踊ちうれもそのハ　野水
懸くこに餅ゆう初虫の　芭蕉
うちたきしたし家畑うあ筆　芭蕉
簾ふのく消うて稀れ蕎さう　野水
三絃かんん不彼の世さい　人　重辰

[illegible]て行[illegible]の碁を[illegible]る[illegible]

[illegible]さて　七十　杜國

[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]の傘[illegible]　杜國

蓮[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]

月[illegible]　[illegible]

[illegible]を[illegible]　[illegible]

秋[illegible]の虚[illegible]　[illegible]

[illegible]の實[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　芭蕉

[illegible]を典侍の局の西[illegible]　杜國

三千[illegible]鸚鵡尾[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]

つゝなくく事僧堂

中歩

[illegible]月[illegible]の[illegible]す雲の[illegible]　杜國

こ[illegible]の[illegible]り[illegible]の[illegible]ふ[illegible]ま　重五

歯[illegible]の[illegible]ふ[illegible]初[illegible]人[illegible]　野水

心の[illegible]門[illegible]行[illegible]ある[illegible]ちる　芭蕉

馬糞掻(カク)[illegible]て風の[illegible]の[illegible]　荷兮

茶[illegible]湯者[illegible]む時人の[illegible]莫(メンオ)　正平

[illegible]ぬ娘の[illegible]
燈籠[illegible]
つゆ秋のすゑふかき撰 [illegible] 杜國
蕎麥さく[illegible]
名月夜双六[illegible]の張[illegible] 野水
[illegible]買(カフ)みちにほ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]のわ[illegible]雑を[illegible]
[illegible]婦の[illegible]

[illegible]浪の水[illegible]行
佛喰[illegible]る奥解(ハト)[illegible] 芭蕉
縣[illegible]
[illegible]形(ゲイ)莖[illegible] 畠六
[illegible]
真[illegible]の馬[illegible] 野水
[illegible]
[illegible]屋[illegible] 杜國

捨しるを宗芹長さのみつる時水
晦日とさもかく力賣る年事又
ものの紅葉國の笠色つりま荷
襟しうる雄の片袖をとく大意
あるを人と指なく搾く春雨さ事又
芥子のなかくるを花禅杜宇
三ヶ月のをを晴く蛙の鳴蕉
好瀧のなかく琴のくと者野

京師なるやうてをを放る杜國
鮮よりあ会佛藪なるつる笹
のけすき行燈に起伏野水
なるこの川を夜風の笹引事又
去の花桜たまの花桜のをを人笹
をのをを笹りなるを松のかく去

なを波津[illegible]あ一次繼[illegible]
[illegible]

炭賣[illegible]ものの[illegible]まこそ黒の[illegible]免　重五
ひとり[illegible]軒[illegible]を鏡　麿　寒　荷兮
花蘇馬骨の雪ふく峠の[illegible]　杜國
鶴[illegible]月[illegible]　野水
この[illegible]秋の[illegible]酒[illegible]　芭蕉
[illegible]市[illegible]振[illegible]　羽笠

頼義川や明歴千代家の徽を　荷月
いとゝしの新なるこのしるしかな　亭主
牧ふ山布搗　再さわらいしく　野水
うゝ家そゝちに越る三平　杜国
拾ひ行くゝわるゝ鷺は離れ雨　羽笠
炎天の最炎燈ふ人をりん茶　芝蘭
門守の箱に魚のゆこりく寝る　亭又
血刀うゝ伝身の傍こゝろ　荷月

夢ひらめて本御の達七月　こゝく　杜国
ふ四十八紙豆　出ゝくなゝ　野水
ゝ泣猫の懲とまてる　芝蘭
僧ゝのいゝ伝歌冬ゝ　春　羽笠
白慈婆ゝあゝ水ゝあを流る　荷月
宣旨ゝこゝく釵を鑄　亭又
八十年ゝを三月る童母ゝて　野水
なゝぐゝそもる七夕のゝ　杜国

冬の日

西南に桂林の一夢さめて　羽笠
蘭のあふりうつ　トホうの音　芭蕉
鉢叩き賢愚の女房うつる　重文
鉢瓶に栗拾ふなの花　荷兮
くやしかるかかと正月す　杜国
清く更る面影の寒さ　文　野水
寅の月雲に飛ぶ　芭蕉
ことつのりまよ　東京の地　羽笠

にのきーて雨ともちあ人の像　荷兮
泥くさい沼のさいかち花の根　重文
鄙すぶあのつま　やもめ　杜国
狐女の下ー　鐘ふも　風　芭蕉
小ぶりなる簾ちやうく　羽笠
初夢と責るもの　杜国

田家眺望

雲月や鶴(カウ)の行々(ツク〻)あらいのて　荷兮

名ばかりの日名ばかりなる雪　芭蕉

樗檜山家の俤を木枯深　重五

八百屋ぞるうしれ塩これて　杜國

青竜の影よ昆見て月のうすく　羽笠

酌とる童(わらべ)茶切り　埜水

秋のころ猿沢の池にあそぶ　芭蕉

澄くもれる月の宿とゆる寺　荷兮

麻ゝしてつばきの花の落る音　杜國

茶ゝ糸遊ゝ風の秀　重頼

雉追に烏帽子も女又三十　野水

庭下に麦蒔ころの落衣　知足

ものゝ山橘ゝ咲ころ　荷兮

麻うゝとゆふ奇の集　あむ　芭蕉

江を行く獨不菴と世を捨て　重頼

東に月出ゝ身をかくす　杜國

寺ゝ衣笠ゝ花と共拂　野水

籠輿ゆゝ夜木瓜の山あれ　野水

骨ゝ枯ゝ山ゝ洞ゝ山ゝ　芭蕉

乞食ゝ蓑ゝ笠ゝ　荷兮

泥のゝ人に屋ゝ引鯉を捨ぬ　杜國

雨ゝ幸ゝ遊むかれ　重頼

手にとる傘は小角豆の花ゆかし　野水
萱屋まばらに炭團つく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮實　芭蕉
も川うきし飯臺のぞく月の前　重五
露どくこゝろ風やうのゆしま　杜國
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
豆腐つくりて母なる喪に入　野水

元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘をはなをうつ　うりう
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜國
春のしらすの雪はきをよる　重五
水干を秀句の聖わかやかに　野水
山茶花匂ふ笠のこがらし　うりう

追加

いのくさんよる雨しとしと　敷　白雪

橋ゆきあるのたくらの　松　蓬

こくさ知下宮に咲くをちやたて　立夏

檜笠ゆく文も風のもと　鶯　杜國

郭公　蛤かりし月夜　海　芭蕉

ひとりゆく橋をとのくの岐阜山　梦水

江南亭　珠碩亭ひさごを送りてこれ

是を酒のもりを酒を命ずるもの

あるは武を大樽を造りて江湖をわ

れ知いつる物を人面をよも異なり五湖

なる恵ふかみして用ることの

はつゝゝおもわるとあるを嫌ひあや

めてけらちる　瀉る　醒てうるる

日月陽秋こさらこのはして雪あけ

如乃商売ならぬ郭公も、うたたねの夢
おもを古歌人とも乃ゝえ、なるまて宣風雅
乃藻思をいつもとまらぬ是いつかたの
やこころ乃ゝて乾坤の外なる事を出て
物のことを云ゝ毎日内よりおとりの

元禄三六月　越智　越人

花見　翁

木ゝ乃ゝ花ゝよりけも鶯を掃ゝ郭
西日乃とうけたゝゝ気なり　珎碩
旅人乃風かさ打ゝ袁ゝるゝ　曲水
ゝゝゝも羽ゝゝぬ生力ゝ鞘（ヒキハス）　翁
月待ゝ假ゝ内裏の司召　碩
粉白つゝる松ゝゝやわゝ　水

鞍置る三歳駒よ秋の暮　翁

名のみ立くて降る雨　碩

八辺に流れの涌湯ぬる〻夢　水

中も焼れぬる山伏　翁

紅の涙を唯一立えぬしらず　碩

かなしき命なりけり　水

抱れて寒の喰ふ蚊　翁

月見れば新乃雫ぬる露　碩

秋風乃新をとゝのる波の音　水

鳳ゆく〻うゝ〻や白ふる松　翁

手新墳花乃盛ぬ一角田　碩

巡礼死ぬる乃の〻ぬ乃ふ　水

何ぬる夏嬉の現ぬあれる　翁

又出ぬ〻の物さく　碩

四羅〻り戒いとゝ〻ぬ　水

熊野〻ゝ紀と注ぬ〻ぬ　翁

[illegible] 碩

酒でさけたまはるまゝ　水

双六乃目をのこすまて番ひて　翁

假れ指佛よむの念仏　碩

中くる土間よ赤きに蚤見る　水

一面名月星ちらすあるを　翁

惜れいなる濯乃れを美　碩

月見しくよ明る月　水

花薄あるるまゝ　翁

唯四方なる草庵　碩

一貫れ銭もつ、の水乃ら　水

醫者乃ちまい飲ぬ分　翁

花候乃ら菩野あるを人迫　水

蛙乃ちゝ　碩

翁　十二

珠碩　十二

曲水十二

いろ〳〵の名をむつりやまちのあま　珠碩

〻〻れて塩がまの浦はさわぬる　翁

蝙蝠の水こうまつをさし出て　路通

かゝる籠の人をもぬぎ捨　越人

紫蘇の実をこゝまでに今の盛者　碩

親ゐ　ゐ〻しいろ月を地ふ　令

秋の夕宮もりの色殊ひなる　通
うぶすなに礼ていとうとふ　仝
うつり香乃殊識を貴ひさまた　碩
小六うしひ一市かうか　仝
鯱弱乃ちいさく見ゆる川の塢　通
会俳ゝて松のもとのさ　仝
うら〻に茶もうれを来蕃　碩
庄野〻里乃夫る松ふされ　仝

旅姿雅さ人乃嫗つれく　通
花まてあのひよ月い嶋　仝
ちかのさす樫の下を和ふり　碩
生鯛あくうる浦ちさ　仝
し村の廣さみ醫ちゆ　荷兮
拔乃さんをけ　越
かさうさる安紙退庵も　兮
ちさ法もす酒乃法ちさ　人

なへうゑる所乃ゆゑ考へひらき　兮
蕎麦ハ白うり　山ゝ胴中　人
うゝんうん　墨乃ちつれの所歌　兮
ちこちつるつのこゝ裸ゝ　人
ゆつゝゆゆ　白玉ちとちつる　兮
文珠の智恵も　愚癡　人
なれ減みゝ　ひゝゝ味噌　兮
何とも　ゝめよ　ゝる　弱棚　人

志乃ゝ義の松ゝうゝ　兮
身ゝゝるゝ　顔をゝ　今
汗の香をかゝゝ衣をゝ　人
志ゝゝれ面ゝゝ　今
義ゝゝゝ又百人ゝ服ゝ　兮
ゝゝハ嬢ゝゝ　今

孫子九
義一

活函八
花の与十
越人八

城下　野徑

鉄炮乃遠音に暮る外山哉
物の小麦乃渡てくゝりし　里東
雨風ゝまぬの小貝拾ひて　泥土
なもぬる一川　潮（モラ）ひるゝ　乙州
暮いそゝしこ人さゝりる　怒誰
秋の黄蕎麦　弥碩

雪降花の細雪にて枝をたわめて　筆

同の中松をくゞり足をかゝゆる　野徑

今も又川の面をくゞり芝へ　里東

新乃松のしゝ生つきや　泥土

馬よりも赤き厳をたゞやうて　乙州

一里とはなれぬ　山乃下前　怒誰

足ゝ行きて宮屋の庭も踏しめを　泥土

拾れ出ぬ湖面ゆくゝれて　里東

雪舟よ蕪村の松安井家さん　野徑

寺を歩いてつゝ丁百ゝ銭　乙州

時花よ宮屋をよくゝ言ふ　珠碩

蕎麦ゝ乃松ゝ乃ゝ　怒誰

くゝ行きよ分ても敷ゝ　里東

寺乞乞ゝ　珠碩

乃みたゝ乃ゝ　乙州

古さゝちのくる　野徑

時々者百姓共も烏帽子
能所を見習ふ供御乃蛤　怒誰
多和かなき松島美哉浦々　泥土
連も力ともに皆々仏なり　弥碩
かゝる風乃大悪寺縄を吹通　里東
雲乃こゝろに用叶へてさ　野徑
朝凪さ花ちらさぬ波　乙州
日迄者月ゝ蒸食奥もす　泥土
　怒誰

看経乃嚏よ波を吹こゝ嘆気哉　里東
四十年老ぬ人ゝ涙　弥碩
鬢ゝ白に枕乃跡を寝ぬ　乙州
醉を細ゝよあらぬ吹ゝ　野徑
牧村乃花八ゝ家ゝ面ゝ　怒誰
田ゝ片隅迄苗乃ゆらぎ　泥土

野徑　六
里東　六

泥土　六
乙州　六
怒誰　六
孫碩　五
筆　一

雜

乙州

龜乃甲亨ふる時ハ鳴き哉
唯牛番ふる風乃ふく音　孫碩
百姓乃末孫敬仕まつれのきて　呈東
小ふ奇ぬ乃ゆるかゝりの縄　探志
獨寝く奥乃岡ひろき旅の夜　昌房
幡幡　寝て　ゆるも　蛾　正秀

秋萩乃声ちかき場を流れ　及肩
風吹ば如減乃志ろの波乃り　野径
雲乃ゆきき絶て月乃都　二嶋
雪乃やうにあるかまくらの塵　乙州
初花よ離の第一番　孫兵
人のそゝ高てあらまほしき　里東
作篇乃番に依てこゝあひて留の仮　探志
庵乃ほとに起てはゝ島帰　昌交

秋入乃巾乃ぬくもりより　正秀
まゝ上京をアこゆるやいさむ　及肩
蓋よ盍鳥羽の野屋ハ今年茶　野径
雀を茶のよ　竈乃ぢぐ先さ　二嶋
うす黒るねんみるとこゝあ　乙州
秋ハしなゝ蛩声のもゝのぬれ　孫碩
深て京よ本帰　袷の祝すゝ　里東
撰ハのまゝ　ましてゝ　探志

暗かるまに菜蔬乃下をこそ付　昌房
猶ゐを呼る郭公のゆゑ　正秀
いとまなる徒一篇に狭衣　及肩
ゆゑ沒かゆる鯉棚　乃秋　野径
ちゝくゝぬ切籠の殘る風吹　二晴
ものか乃庵　もみのゝ成角　乙州
冷酒の味のつくこそ嬉しけ　弥碩
燥掃　ちゝ沒　よ　ゆ　里東

月をぬゝ沒秋のうそ風あけ　探志
こゝろ　きかゝ　こゝ　こゝ　こゝ　侍　昌房
ゆこゝ　ゆ　ゆ　狩　ゆて　編　ゆけ　正秀
縄を　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　上　ゆ　及肩
花乃比屋の日給　ゆ　ゆ　ゆ　野径
ゆ　ゆ　ゆ　獅　ゆ　ゆ　二晴

乙州　四
弥碩　仝

里東　四
探志　仝
昌房　仝
正秀　仝
及肩　仝
野徑　仝
二蕭　仝

田野　正秀

疇道や苗代時乃角大師
明きそう雲あむ野氣乃顔　孫碩
鶏ふとのあやとれ鳴しまこの元　仝
かまとゝ杜の門口乃文字　秀
月朝ゑ利休乃家を鼻ゝの窓　仝
度〳〵芋をこそ〳〵なるの　碩

虫とも皆つて狭しく鳴やらむ　秀

抜足しの木履とられぬる　碩

誓文を百も書て出る娘子　秀

なくなくミえり彼乃侍　碩

須磨人ハまさ物に自由なる蜑派　秀

狐乃化る弓かまへやる　碩

月氷る師走は宵の銀河　秀

学理に居る勝も進まぬ　碩

いつぬかて大腸指をおくれて　秀

猫ある子も矮鶏(チヤボ)に蹴られ　碩

江戸ノ酒を花咲頃に忘しかね　秀

あいの山弾まその入逢　仝

雲雀啼里を厩(ヘヤ)巽(コヱ)ハなき蔵　碩

火を吹て居る禅門の祖父　秀

本堂ハまさ荒壁乃ゑら絶　碩

羅漢狭く志ゆ乃舞ひぬ　秀

歯を痛人乃為を作る事　碩
ふるゝ雪さへもすゝぎ洗ふ　秀
藤垣乃穴なる紙燭を挿をき　碩
口上書ぬいとさへ時宜　秀
あかしなる小判なる筆袴　碩
秋入初る　肥後守　隈本　秀
幾日経も経て用ゐる後考証　碩
寸布なるひとり　あ[illegible]やなり　秀

沢山なる元めくやを吹らしめく　碩
呼あまなるも猫を呼ふ　秀
なる紙は小人所乃雨あゝの　碩
やしほの楓木の茅蘭立　秀
蓑笠なる雪踏拂つる高あり乃　碩
小野まゝ〳〵る場にまゐる強　秀

正秀　十九
跡碩　十七